

～輝きの子育て～

徳川家康の言葉

「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。ここに望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。堪忍は無事長久の基。いかりは敵と思え。勝つことばかり知りて、負くることを知らざれば害その身にいたる。おのれを責めて人をせむるな。及ばざるは、過ぎたるよりまされり。」

これは、徳川家康の遺訓です。

家康は江戸幕府の礎を築き、明治維新までの約250年間の平和な時代を創った偉人です。1542年に愛知県岡崎市に生まれ、その後、織田氏の人質として、又、今川氏の人質として忍従の日々を過ごし、信長、秀吉に臣従して最後に、関ヶ原の戦い（1600年）に勝利し征夷大将軍に任命されました。

江戸城に幕府を開き天下統一を成し遂げました。織田信長、豊臣秀吉にくらべ、派手さや強烈な個性の発揮がなく、人気がないが先見の明があった人でもあります。湿地が多い江戸を今日の東京にするための大土木工事（河川の流れを変えたり、水道の整備、運河の建設等）を計画施工した手腕は大きく評価出来ると私は思います。

この家康の遺訓は、後から作られたという説がありますが、いかにも家康らしい名言だと思います。ポイント解説をしてみます。

- 人生は長く、苦しいことが多いが、努力と忍耐をもって一步一步進み続けることが大切である。
- 不自由を当たり前と思えば不満は生まれない。
- 贅沢したいと思ったら、貧しく苦しかった時のことを思い出して我慢しなさい。堪忍することは長く栄えることです。家康は61歳で幕府を開き、75歳で亡くなっています。「鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギス」という性格＝忍耐強さが表われています。
- 瞬間的な怒りで我を忘れて爆発すると自分や自分の回りの人に迷惑を掛け、人生を狂わすことになるので怒りは敵と思いなさい。
- 人は負けたり、失敗し、辛い思いをすることで人間性が培われ、養われます。勝ちばかりを体験し、負け知らずであれば、人の気持ちも理解できない傲慢な人となり何時か壁にぶつかります。
- 自分の行動について反省し、人にその責任を転嫁してはいけません。政治が悪いから…、上司が悪いから…、仲間が悪いから…、と自分を正当化しないように。ジョン・F・ケネディ（第35代アメリカ大統領）はこう言っています。

「あなたの国家があなたのために何をしてくれるのではなく、あなたが国家のために何が出来るかを問うてほしい。」このセリフは有名な言葉です。

- 論語に「過ぎたるは、なお及ばざるがごとし」という言葉もあります。何事も行き過ぎは良くないと言うことです。仕事のやりすぎ…、真面目すぎ…、賢すぎ…、でしょうか？やり足りないのも疑問です。

因みに、私事になりますが、その時、その時に読んだ本や聴いた言葉で印象に残っているものを、極力メモにしています。後で読み返してみると、その時その場の置かれた状況が思い出され、感慨深い思いにさせられます。私の高校時代は岡崎城（家康誕生の城）の中を歩き、学校に通っていました。

その時知った言葉です。この言葉の意味の深さをもう少し早く理解していればよかったと悔いの残るところです。「ことばとの出会い」を大切にしたいものです。